

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.171

2007年8月

平野総長がフラインク大学設立550周年記念式典に出席



目次

●ニュース

平野総長がフライブルク大学設立550周年記念式典に出席	3
「医学部附属病院門及び外塀」が登録有形文化財として答申される	4
平野総長が全学教育科目「名大の歴史をたどる」で講義	5
航空部が平野総長に優勝を報告	5
公的研究費の不正使用防止推進部署を設置	6
大学施設マネジメント研究会を開催	6
シンポジウム「キャリアパス ～ Research & Mind が開く『未来への扉』」を開催	7
講演会「産官学連携によるイノベーションと起業」を開催	7
日本政策投資銀行と包括連携協定を締結	8
ミシェル ザンク博士に名古屋大学レクチャー表彰楯を贈呈	8
名古屋大学学術奨励賞授与式を挙行	9
名古屋大学職場説明会を開催	9
平成19年度中堅職員（3年目）研修を実施	10
平成19年度主任職員研修を実施	10

●知の未来へ

刑法解釈論と裁判員制度——難しい話はもういらない？	11
古川 伸彦（大学院法学研究科准教授）	

●地域にひらく

ICTの利活用による地域貢献・地域社会活性化プロジェクト	12
総務省戦略的情報通信研究開発推進制度（SCOPE）による名大の社会貢献	
安田 孝美（大学院情報科学研究科教授）	

●学生の元気

第61回名古屋大学・大阪大学対抗競技大会	14
第56回東海地区国立大学体育大会—男子4位、女子5位—	

●キャンパスクローズアップ

全学教育棟（I期）	16
-----------	----

●部局ニュース

第13回理学懇話会及び高校生のためのサイエンスカフェを開催	18
公開講演会「雪と氷を通してみる『不都合な真実』」を開催	19
平成19年度工学部懇話会を開催	19
言語文化フォーラムを開催	20
台湾南台科技大学学長一行が国際開発研究科を視察	20
留学生のための就職支援セミナー（第1回）を開催	21
地域貢献特別支援事業「都市近郊の農業教育公園」第1回講演会を開催	21
オナガドリの剥製標本寄贈における感謝状贈呈式	21
附属図書館が2007年春季特別展を開催	22
アフリカキャンペーン2008講演会を開催	23

●環境への取り組み

環境や健康を守るために化学物質を管理する	24
----------------------	----

●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成19年6月16日～7月15日

●INFORMATION

概要パンフレット「名古屋大学プロフィール2007」を刊行	28
------------------------------	----

●イベントカレンダー

●ちょっと名大史	28
----------	----

明治初年愛知県公立病院外科手術の図	32
-------------------	----

平野総長が フライブルク大学 設立550周年記念式典 に出席





平野総長は、7月4日(水)から9日(月)までの間ドイツを訪問し、フライブルク大学の設立550周年の記念式典に出席しました。フライブルク大学は、1457年に創立されたドイツ南西部に位置する大学で、哲学者ハイデッガーらが教鞭を執ったことでも知られています。現在は2万人以上の学生を擁する総合大学であり、本学とは2001年に大学間学術交流協定を締結して以来、国際学術コンソーシアム(AC21)のメンバー校としても活発に交流しています。

5日、総長一行は、ヨーロッパにおけるビジネス訴訟の特殊性に関する研究のために2005年末に設置した「フライブルクにおける名古屋大学ビジネス訴訟研究所」を訪問し、研究概要やフライブルクにおける環境への取り組み等について説明を受けました。午後には、本学インターナショナル・アドバイザリーボード委員でもある、同大学のシュテュルナー教授と会談し、欧州連合(EU)の現状等について広く意見交換する機会に恵まれました。

翌6日には、「岐路に立つ大学－市場と象牙の塔の間で」と題した国際シンポジウムが開催されました。前半

	2	3
1		4

- 1 シンポジウム会場(旧市庁舎)
- 2 式典会場の様子
- 3 LED コースターを用いてプレゼンテーションする平野総長
- 4 シンポジウムで議論する平野総長(右端)



は、大学長ら高等教育専門家によるプレゼンテーションがあり、総長は、日本の大学を代表して、現在大学が直面している課題やトレンド、基礎研究と応用研究のバランスや本学の取り組み等について発表しました。後半は、大学長らによるディスカッションが行われ、ボローニャプロセスのインパクト、教育の根本的目的や大学が直面する財政的困難について、大学が産業界や社会に積極的に理解を求めて行く必要性等について活発な議論が交わされました。

7日には、欧州委員会(EC)のジョゼ マヌエル ドウラン バロゾ委員長やアネッテ シャヴァーン教育研究大臣らを来賓に迎え、550周年記念式典が盛大に行われました。バロゾ委員長からは、「『国際化』を進める

過程では、一元的な国際化ではなく、『真の国際化』が必要である」との問題提起があり、大きな反響がありました。また、同大学評議会のホルスト ヴァイツマン議長から、「生きているうちに公正にお金を稼ぐことは重要であるが、来世に持って行くことはできないので、意志あるうちに社会もしくは大学に寄与することが大切です。そこで私は、フライブルク大学に100万ユーロ(約1億7千万円)を寄付することをここに宣言します。」との発表があり、会場から大喝采を浴びました。当日は同窓生を含む1,400人が参加し、また、式典の構成については演劇と来賓挨拶を組み合わせた形にするなど斬新な演出があり、多様な記念式典のあり方に触れる有意義な機会となりました。

「医学部附属病院門及び外塀」が登録有形文化財として 答申される



病棟の前面に位置する「旧愛知病院正門及び外塀」
(門柱のデザインが、病棟基壇の柱にも引用されていることがわかります。)
(1999(平成11)年に復元・保存されました。)

6月15日(金)に開催された文化審議会の答申で、「名古屋大学医学部附属病院門及び外塀」が文化財建造物として登録されることになりました。国の文化財への登録は、全国の国公立大学では既にいくつかの事例がありますが、愛知県内の国公立大学では初めてのことです。

登録対象の「門及び外塀」は、1914(大正3)年に建設、1930(昭和5)年に改修された旧県立医学専門学校、旧県立愛知病院の正門や外塀など3件からなります。門の角柱には花崗岩が用いられ、デザインはローマ建築における柱の形式のひとつであるトスカナ式オーダーを基本とした古典的なものです。外塀は釉薬が施された、表面に櫛引きまたは引掻き溝を刻んで焼成したタイルであるスクラッチタイルで仕上げられ、隅角部は立体的でシンプルな幾何学模様様のテラコッタ(素焼きの粘土製品)で装飾されています。いずれについても、昭和初期の建築材料の質の高さやデザイン傾向を窺うことができます。



敷地の東南角に位置する「旧愛知病院通用門及び外塀」
(スクラッチタイルとテラコッタは、1930(昭和5)年の改修によるものです。)

建造物の文化財登録制度は、平成8年の文化財保護法改正に伴い導入されたもので、登録することにより、保存・活用のための費用に一部国の補助が受けられる等の優遇措置があります。登録基準として、建設後50年を経過し、「国土の歴史的景観に寄与しているもの」「造形の規範となっているもの」「再現することが容易でないもの」のいずれかに該当することが条件として定められており、今回の登録は「造形の規範となっているもの」として認められたことによるものです。

なお、「名古屋大学医学部附属病院門及び外塀」については、大学文書資料室編「名古屋大学紀要」(第10号、2002年刊)に詳細な記載があるほか、名大トピックスNo.151「ちょっと名大史」でもすでに紹介されています。数年後には、著名な建築家が手掛けた豊田講堂や古川記念館も建設後50年を迎えるため、文化財登録をめぐる今後の動向が注目されます。

平野総長が全学教養科目「名大の歴史をたどる」で講義

平野総長は、6月26日(火)、IB電子情報館において、「名古屋大学運営の基本姿勢」をテーマにした全学教養科目「名大の歴史をたどる」を、約190名の学部学生を前に講義しました。

「名大の歴史をたどる」は、大学文書資料室が大人数初年次教育として開講している講義で、総長が学生に直接語



講義する平野総長

りかける「総長講義」は今年で4年目を迎えました。

講義終了後、受講生が提出した感想文には、「『勇気ある知識人』。これは本当によい言葉だと思った。この言葉の本当の意味、総長の思いが今日の講義でしっかり分かった。」「お話を聞いたのは入学式の時だけで、しかもすごく遠くからでしたので、今日の講義はとっても貴重な時間でした。」「総長の講義を聞いて、教養力の大切さ、そして自分の意志の大切さというものを改めて知った。この大学4年間をより充実させようという気持ちが湧いてきた。」「話を聞いて、名古屋大学のことがさらにわかったし、大学というものがどんな場所であるのか、何を目指しているのかがわかり、大学生として学問に励んでいこうと思った。」など、総長講義の実施が有意義であったことを示す感想が数多く寄せられました。

なお、この講義の様子を収録したDVDは、附属図書館の視聴覚資料として登録されており、過去3回の総長講義とともに閲覧することができます。

航空部が平野総長に優勝を報告

今年3月3日(土)から11日(日)まで埼玉県妻沼滑空場で行われた、第47回全日本学生グライダー競技選手権大会団体の部で優勝した体育会航空部員による総長への優勝報告が、6月22日(金)、本部1号館総長応接室において行われました。

全国各地の競技会を勝ち抜いた17大学20チームが参加した同大会では、大会会場である妻沼滑空場をホームグラ



記念撮影

ウンドとしている関東勢が圧倒的に強く、46回の歴史の中で関東勢以外が優勝したのは、団体戦では関西大学の1回のみであり、関東勢でも優勝しているのは慶応、早稲田、日本大学の3校のみという少数の関東私立大学の独占状態となっていました。

その中で本学航空部は、平成9年に高性能機「ディスクス」を導入したこともあり、同大会への連続出場はもちろん、団体・個人ともに準優勝を含む入賞を重ね、さらには昨年まで七大戦7連覇と着実に実績を積んできました。

そして、ついに同大会では国立大学としては初めて、さらには東海地区の大学としても初めて、悲願の全国優勝を果たしました。

平野総長は、報告に訪れた航空部員に対し、「関東の私立大学勢が圧倒的な強さを誇っている中、国立大学として、また東海地区の大学としても初めての優勝ということで、大変誇りに思っている。安全面には十分注意して、来年度以降も優勝を目指して頑張ってもらいたい」と激励の言葉を述べました。これに応え、航空部員も、「連覇を目指して、部員一同、今後も厳しい練習に励んでいきたいです」と、連覇への誓いを新たにしていました。

公的研究費の不正使用防止推進部署を設置

本学は、文部科学大臣が示した「研究機関における公的研究費の管理・監査のガイドライン」に基づき、公的研究費の不正使用防止に関する推進部署として、7月1日付で、大学運営支援組織である研究推進室にコンプライアンス部門を新設しました。また、外部資金の使用状況について、より実効性のある内部監査を実施するため、現行の監



関係職員を前に訓辞する総長

査室の体制を強化することとし、専任の事務職員をそれぞれ配置しました。

翌2日には、当該職員に辞令交付が行われ、その後、列席した関係職員に対し平野総長から、「すでに名古屋大学では、公的研究費の不正使用防止に誠実に取り組んできました。その結果、これまで不適正事例はありませんが、今後このような体制整備を図ることにより、なお一層適正な使用環境を実現したいと考えています。名古屋大学は、『自由闊達に』の研究方針のもと、世界トップレベルの輝かしい研究成果を挙げてきましたが、この『自由闊達に』の方針が失われることとならないよう、研究者からの意見も参考として、不正使用防止に関する取り組みを強固なものとして下さい。」との訓辞がありました。本学では、毎年、文部科学省関係の競争的研究資金を約100億円受け入れており、この体制整備によって、大学全体の公的研究費の実態を把握・検証し、不正発生要因に対する改善策を講じて、不正の生じない研究環境とすることとしています。

大学施設マネジメント研究会を開催

大学施設マネジメント研究会が、6月14日(木)、野依記念学術交流館において開催されました。

施設マネジメントとは、「教育研究活動のために施設とその環境を総合的に企画・管理・活用する経営活動」であり、本研究会は、施設資産の有効活用を図る国公立大学、自治体及び施設マネジメントサービスを提供する企業による、情報共有と意見交換の場として発足したもので、今回は、中部地方を中心とする国公立大学、官庁、民間企業から130名を超える参加者がありました。

研究会は、最初に、杉浦理事及び来賓の岡 誠一文部科学省文教施設企画部技術参事官からあいさつがあり、引き続き、恒川和久工学研究科講師による「名古屋大学にお

ける施設マネジメントの取組み～FMにおけるデータ管理の重要性」、板谷敏正プロパティデータバンク株式会社代表取締役による「国土交通省など大規模法人の施設マネジメント～ASPモデルの活用について」と題する2件の講演が行われました。

恒川講師は、本学における施設マネジメントの取り組みから先進的な事例を紹介し、大学における施設マネジメントのあり方についての提言を示し、板谷氏は、国内の大企業や大規模法人の膨大な施設データベースを管理する実績を持つ、アプリケーション・サービス・プロバイダーの仕組みについて紹介し、データ管理の重要性を指摘しました。

続いて行われたラウンドテーブルディスカッションでは、講演をした両氏に加え、大阪大学等の施設マネジメント研究者や実務担当者、また会場からの発言者により、大学施設マネジメントのあり方や将来像について、活発な議論が交わされました。

研究会での議論を通じて、大学経営における施設マネジメントの重要性を認識するとともに、産官学、並びに大学間で連携を図り、コンソーシアムの設立など実施協力体制構築の可能性を検討することについて合意を得ました。

今後も継続して研究会を開催し、より深い議論を重ねていくこととしています。



あいさつする岡参事官



ラウンドテーブルディスカッションの様子

シンポジウム「キャリアパス～Research & Mindが開く『未来への扉』」を開催

シンポジウム「キャリアパス～Research & Mindが開く『未来への扉』」が、7月14日(土)、野依記念学術交流館において開催されました。このシンポジウムは、文部科学省科学技術関係人材のキャリアパス多様化促進事業で採択された「博士学位取得者に対するノン・リサーチキャリアパス支援事業」の一環として行われました。当日は台風の接近による大雨にも関わらず、全国から約80名のポストドク・博士課程後期課程の学生等が集まり、会場は満員になりました。



パネルディスカッションの様子



パネラーの方々

シンポジウムでは、国際協力や教育産業の面白さについての講演や、博士課程修了後、産学連携への道に進んだ経験者からの話、また、人材紹介サービスの新しい取り組み等についての話があり、参加者は、博士課程、ポスドク修了後のキャリアパスについてのヒントを得ていました。また、男女共同参画などの話もありました。

パネルディスカッションでは、企業の元人事部長や大学の立場などから、博士が社会でどのように求められているか等について議論されました。講演者からは、参加者に対し「自分の能力に自信と誇りを持つこと」「専門を生かして社会への貢献を「面白くてやりがいのある仕事はたくさんある」などのエールが送られました。

終了後も多くの参加者が会場に残り、講演者や教員らに質問や相談をする姿が見られ、充実したシンポジウムとなりました。

終了後も多くの参加者が会場に残り、講演者や教員らに質問や相談をする姿が見られ、充実したシンポジウムとなりました。

講演会「産官学連携によるイノベーションと起業」を開催

6月26日(火)、国際開発研究科多目的オーディトリウムにおいて、名古屋アメリカン・センターとの共催で、「産官学連携によるイノベーションと起業」と題した、リチャード ダッシャー博士の講演会を開催しました。

ダッシャー博士は、スタンフォード大学において、大学発ベンチャーの育成、産学連携のコーディネータ役を務め、



講演会の様子

シリコンバレーの今日を築いた立役者の一人として知られており、現在、アジア・米国技術経営研究センター所長、スタンフォード大学顧問准教授、同大学集積システム研究所業務担当所長を務めています。

講演会では、教職員、学生、他大学教員など61名が参加し、まず、ダニエル ロッチマン名古屋米国領事館首席領事からあいさつがあった後、渡邊明彦産学官連携推進本部起業推進部長からダッシャー博士の紹介がありました。

同博士は、流暢な日本語で、大学、民間企業、政府それぞれの役割や、日米における産官学連携の比較・分析、特許出願に関する日米の相違点、アメリカ政府の大学研究費助成の方法であるマッチング・ファンドのシステム、産官学連携の将来の在り方、大学発ベンチャーにおける産学連携の在り方等について、スタンフォード大学における企業との双方向のより緊密な関係の構築の例などを示しながら、研究開発の初期段階から知識移転、技術移転へ至るまでの仕組みをわかりやすく解説しました。

講演後、熱心な参加者から多岐にわたる質問があり、同博士がそれに丁寧に答えるなど、とても示唆に富んだ有意義な講演会でした。

日本政策投資銀行と包括連携協定を締結

6月22日(金)、本部1号館第2会議室において、平野総長、宮田副総長、阿部 健日本政策投資銀行理事及び小笠原 朗同東海支店長列席のもと、日本政策投資銀行と包括連携協定を締結しました。

調印式では、総長及び阿部理事のあいさつの後、協定書に調印し、協定が交わされました。



調印後握手する平野総長（左）と阿部理事（右）

本学と同銀行は、昨年より、名古屋大学産学官連携推進・連絡調整会議等で、産学連携の推進のため、相互に情報交換を行ってきました。こうした協力体制を組織的かつ包括的な連携へと発展させ、双方の機能、経営資源を幅広く活用することにより、各々の組織目的、社会的責任をより一層効率的に実現していきたいと考えています。

今回の協定締結を契機に、本学は、同銀行の持つ金融・経済を中心とした幅広い知識と経験を活用し、社会貢献における推進体制を一層速やかに整備するとともに、国立大学法人としての自立的な大学経営促進に向けて、相互に協力し、円滑な推進体制の構築を目指します。

ミシェル ザンク博士に名古屋大学レクチャー表彰楯を贈呈

昨年10月10日に開催された第1回名古屋大学レクチャーで講演を行ったコレージュ・ド・フランス副学長のミシェル ザンク博士（本学インターナショナルアドバイザーボード委員）に、今年6月、名古屋大学レクチャー表彰楯が贈呈されました。

名古屋大学レクチャーは、本学学生、教職員のみならず

一般市民等多くの方々に本学が招へいた世界的に著名な研究者の講演を公開し、最高水準の研究に触れる機会を設けるため、高等研究院スーパーレクチャーの一環として昨年初めて開催されたもので、この表彰楯は、同レクチャーにおいて、講演者（レクチャー）への感謝と敬意を込め、新たに制作されたものです。

今回、ザンク博士に贈られた表彰楯は、国内外で多数の受賞歴がある著名な画家である西 大記氏が、“麒麟”をモチーフにデザインしました。モチーフの麒麟は、東西交流のあかしとして1200年間大切に保存されてきた正倉院中倉所蔵の絵がモデルであり、軽やかな筆致で麒麟や鳳凰などが描かれています。麒麟の出現は、聖人が現れ、平和で学問が尊重される世の中になる前兆であると言い伝えられてきました。西氏によれば、今こそ麒麟が出現し、世界が平和になり、学問が発展するように、との祈りを込めて制作したとのことでした。



レクチャー表彰楯（中面）

名古屋大学学術奨励賞授与式を挙

名古屋大学学術奨励賞授与式が、7月18日(水)、IB電子情報館大講義室において挙行されました。

学術奨励賞は、大学院博士課程後期課程1年次の学生で、人物・研究水準ともに優秀で、かつ、研究科長から推薦のあった者を対象に受賞者を決定し、奨学金として年額30万円を3年間(大学院医学系研究科医学博士課程は4年



授与式の様子

間)給付するものです。今回は同制度の第1回目にあたり、196名の学生が受賞者として決定されました。

式には、196名のうち106名の学生が出席し、平野総長から各研究科の代表者にそれぞれ賞状が授与されました。

引き続き、総長から「世界屈指の知の創造と将来を担う勇気ある知識人を育成することによって社会に貢献していくことを目標にしており、次世代を担う若手研究者支援の姿勢を大学の特色として打ち出したい」という考えに基づき、学術奨励賞奨学金制度を創設した経緯についての説明と、「総合大学に学ぶ学生として、豊かな人間性を持ち、国内外での指導的役割を担うリーダーとしての素養を身につけ、新しい時代を作り出す『高い志』を持ち続けてもらいたい」と、受賞者への激励のことがありました。

名古屋大学職場説明会を開催

東海・北陸地区国立大学法人等職員採用試験の第1次合格者を対象とした名古屋大学職場説明会が、7月10日(火)、野依記念学術交流館において開催されました。

まず、同館カンファレンスホールにおいて全体説明があり、平野総長のあいさつの後、佐分理事が本学及び国立大学法人を取り巻く状況や本学職員として期待すること等について話しました。続いて、ビデオによる大学概要の紹介、

今後の採用面接の日程等について説明がありました。

引き続き、より詳しく職場の雰囲気や職務内容を知ってもらうため、同館1階に、個別業務の内容を紹介するブース、先輩の経験を伝えるブース、福利厚生・給与等の処遇を説明するブースを設け、参加者からの具体的な質問に対し、個別に職員が対応しました。約170名の参加者はメモをとるなどして真剣に説明を聞いていました。



全体説明の様子



ブースでの職務内容説明の様子

平成19年度中堅職員（3年目）研修を実施



中堅職員研修の様子

平成19年度中堅職員（3年目）研修が、6月25日（月）、26日（火）の2日間にわたり、野依記念学術交流館において実施されました。この研修は、本学に採用後3年目となる中堅職員を対象に、自己の特性を理解し、より積極的な行動力を養うと共に、中堅職員として必要な自己表現力、発表力を身に付けることを目的として今年度から実施しているもので、今回は21名が参加しました。

受講者は、採用時から現在に至る2年間を振り返って、グループ毎に意見交換及び発表をすることによって、同期相互で共通認識を持ったり、自己客観性テストやPBI診断（職業行動調査）を通して、自己への理解を深めました。

「中堅職員」という言葉に最後まで戸惑っていた受講生ですが、本研修が職場において自立心を芽生えさせるきっかけとなることが期待されます。

平成19年度主任職員研修を実施



主任職員研修の様子

平成19年度主任職員研修が、6月27日（水）、28日（木）の2日間にわたり、野依記念学術交流館において実施されました。この研修は、職場における役割を自覚し、掛長への準備段階として身に付けておくべき態度や意識、リーダーシップを発揮するために必要な諸能力を養うことを目的として、法人化後に主任に昇格したすべての職員を対象に、今年度初めて実施したもので、今回は平成17年度前半昇格者31名を対象に行われました。

受講者は、過去にあまり経験のない参加型研修ということから、当初は緊張の面持ちでしたが、次第に打ち解け、積極的に現状の自己及び職場の問題点などについて、具体的に意見交換を行いました。

また、目標設定による自律型行動管理について学び、程度の高い業務遂行の計画、実践の方法について考えました。

この2日間で受講者相互及び講師から受けた刺激を基に、受講者一人ひとりの今後の積極的な活躍が期待されます。

刑法解釈論と裁判員制度

——難しい話はもういらない？

古川 伸彦 大学院法学研究科准教授

私の専門とする刑法は、どういうことを行ったら犯罪になるか、それに対してどのような刑罰が科されるか、という国家刑罰権の発動のルールを定めた法律です。たとえば、刑法199条によって、人を殺した者には、殺人罪という犯罪が成立し、懲役等の刑罰が科されます。法律の中でも、最もイメージしやすいものの一つといえるでしょう。しかし、残念ながら、私の研究対象とする刑法解釈論は、犯罪の成立要件を理論的に探究する学問ですが、法律学の中でも、一番わかりにくいと評されることがあります。

たとえば、犯罪とは、「構成要件に該当し、違法で有責な行為である」という定義が一般的です。また、違法に関して、「その本質は結果無価値か、行為無価値か」という争いがあります。これを聞いて、すぐに意味がわかる人は少ないでしょう。実は、わが国の犯罪論は、そのほとんどをドイツの刑法理論から継受しており、刑法解釈論上の法律用語の多くは、ドイツ語を訳したものです。その際、対応する日本語がなければ新たに造語を行うほかなく、それが日常用語から大きく乖離した言葉づかいを生みました。

ところで、裁判員制度の実現を控えた現在、刑事裁判は、裁判員にも理解しうるものへ改革される必要があります。この点をとらえて、犯罪論も、従来のように精緻な議論はナンセンスだ、社会通

念にしたがって犯罪の成否を「実質的に」決めればよい、という指摘もあります。しかし、これは完全に本末転倒です。そこにいう「社会通念」が、もし常に一律に定まっているならば、たしかに難しい議論は不要でしょう。それどころか、いわば「正解」が決まっている以上、法律も法律家も存在意義はありません。

しかしながら、私たちの「社会通念」は、およそ皆一様ではありません。たとえば、駅のホームにおいて、酒に酔った男性Aから執拗にからまれた末、コート襟をつかまれた女性Bが、Aを引き離そうとして体を両手で突いたところ、よろめいたAがホームから転落し、電車に轢かれて死亡した場合、Bの行為は「正当防衛」(無罪)でしょうか、やりすぎとして「過剰防衛」(有罪)でしょうか。このとき、正当防衛の成否を「社会通念」にしたがって判断する、という「理論」は問題解決の役に立つでしょうか。

もちろん、法律の終局的な目標は、現実の事件を社会常識に沿うように解決することです。しかし、そのような解決を導くための具体的な指針を提供することこそ法理論の責務であって、社会通念それ自体を基準にするのは責任放棄でしょう。刑法解釈論も、「専門家どうしでないと理解できない」現状には問題がありますが、それを改善する方向性は、理論を「退化」させるのではなく、むしろ「進化」させることによって、専門用語を使わなくても説明しうるレベルに到達することであると考えています。

裁判員制度は、刑法解釈論の任務を増やしこそすれ、断じて減らすことはありません。



刑事裁判はもはや他人事ではない——裁判員の参加を想定し、音声を自動的に文字化して記録する機能と連動した法廷収録システム(DRS)を備えた、本研究科の刑事模擬法廷。

ICTの利活用による地域貢献・地域社会活性化プロジェクト 総務省戦略的情報通信研究開発推進制度（SCOPE）による名大の社会貢献

安田 孝美 大学院情報科学研究科教授

現在、我が国の産業戦略において、産学連携などで大きな期待が寄せられる大学では、多くの貴重な研究開発が実施されています。一方、地域コミュニティへの社会貢献は、経済効果が必ずしも明確でなく、また一般的には外部資金獲得や論文などの研究業績評価に直接的には繋がりにくい状況です。しかしながら、地域の中核大学としての名古屋大学がその英知を集め、それぞれの専門知識を融合することで地域社会へ寄与することは、社会的責任として極めて重要なミッションであると考えます。その意味で私たちの申請研究「無線インターネット放送による中心商業地（名古屋市伏見・長者町地区）の活性化」が、平成19年度総務省戦略的情報通信研究開発推進制度（SCOPE）

地域 ICT 振興型研究開発に東海地域で採択された2件のうちの1つに選ばれたことは大変嬉しく、また責任を感じています。本稿では、この研究開発プロジェクト構想について簡単に紹介します。

本プロジェクトの概要は以下の通りです。

中心商業地（名古屋市伏見・長者町地区）の過疎化を解決、蘇生させるため、現在活動している地元住民や行政（名古屋市）との連携のもとに、無線インターネット放送という市民メディアを活用した新しいICT時代の街作りの形を追究します。その際、特に動画情報の容易な受発信のためのインフラ整備により、街区の各所からコミュニティにとって有用なコンテンツを制作し相互に

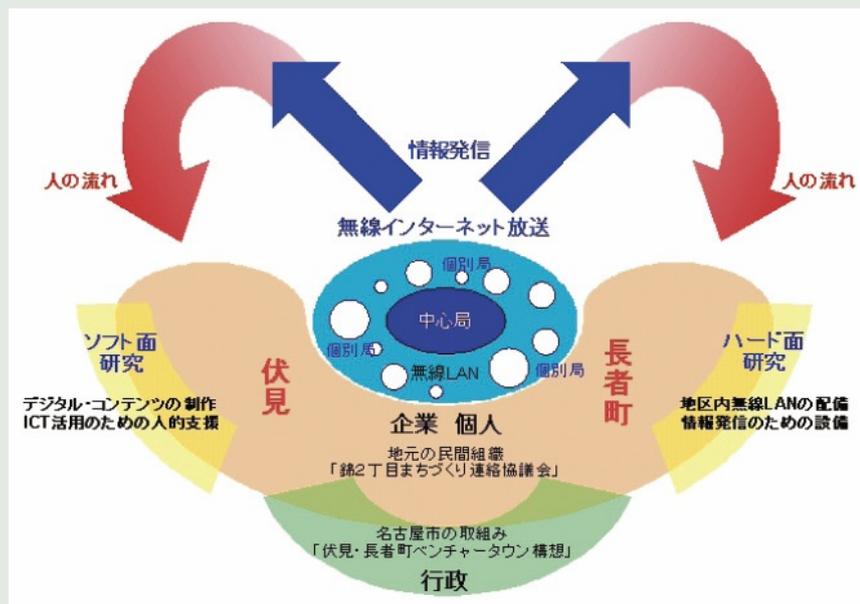


図1 研究プロジェクトの概要

受発信することで街全体が放送局となるイメージを想定しています（図1）。研究期間および直接経費は、平成19、20年度の2年間で総額19,843千円を予定しています。

本プロジェクトの推進体制の特徴としては以下の点が挙げられます。

- (1) 本学における文理の枠を越えた体制を構築しています。そもそも本研究申請に至った経緯として本年6月に名古屋大学の各分野（都市計画、市民運動、市民と行政、メディア情報、教育工学、放送（公共・民間））の研究者が集まり、地元のまちづくりに積極的に活動している方や行政の責任者と共に、林 良嗣環境学研究科長をリーダーとする「名古屋大学長者町研究会」を組織しました。これがここで提案する研究開発の主体となっています。本学からは後 房雄法学研究科教授、川上 淳国際言語文化研究科特任教授、後藤明史情報メディア教育センター准教授、宇佐美 博法学部非常勤講師が参加しています。
- (2) 地域のまちづくりを積極的に推進している「錦2丁目まちづくり連絡協議会」のメンバーが2名研究分担者として参加しています。これにより、主人公である地域住民の意向を十分に考慮した名大の社会貢献の意義を明確にしています。
- (3) 「伏見・長者町ベンチャータウン構想」を推進している名古屋市市民経済局が参加することで、行政の施策とも連携しながら研究を進めていきます。

研究開発はこれからですが、2年間の目標として以下のことを考えています。

地域発の無線インターネット放送による情報発信が、名古屋市の提唱する「ベンチャータウン構想」実現を市民からのアプローチで支えるための役割を果たすことを目指します。そのため地域における放送番組の制作とそのための人材育成等いわゆるソフト面での体制構築と、ICT インフラの整備・拡充を進めるハード面での体制構築を行っていきます。そうした中で地域住民自身によるコンテンツ制作と発信が重要な目標となります。地域独自のテーマとしてアパレル、ファッション、デザインの分野があり、それらに関するコンテンツ制作と流通を期待しています。その他地域の現在に焦点をあてたレポート（商店・商品CM、グルメ情報、老若男女各世代の声など）、えびす祭りなど地域のイベント、歴史のある寺・神社、町の歴史、さらには画廊、科学館・美術館、学校、行政、放送局・新聞社など他機関との連携など、さまざまな企画が考えられます。

2年間のプロジェクトを通して、無線インターネット放送という大衆化したメディアインフラを活用することにより、地域住民が自らの街を考える素地を育成するとともに、地域内外に対してアピールできるコンテンツの制作及び蓄積が地域住民自らの手によって継続的に進められる基盤が構築されることを願っています。そのために研究分担者の皆さんと一緒に、地域の活性を真剣に考えつつ楽しみながらプロジェクトを進めていきたいと思っています。

1959年12月生まれ

1987年 名古屋大学大学院工学研究科博士課程（情報工学）修了
名古屋大学工学部情報工学科助手

1993年 名古屋大学情報化学部助教授

2003年 名古屋大学大学院情報科学研究科教授

インターネットに代表される情報通信ネットワークにおける新技術がもたらす新しい社会の在り方について、技術面、社会面から研究を進めている。

やすだ たかみ



第61回名古屋大学・大阪大学対抗競技大会

第61回名古屋大学・大阪大学対抗競技大会（名阪戦）が、主に5・6月の土、日曜日を中心として、本校が当番校となり開催されました。本年度は、女子ラクロス競技が参加から3年目を迎え正式種目に昇格し、男子31種目・女子13種目でそれぞれ熱戦が繰り広げられました。今大会の結果は、男子が16勝13敗、また、女子が9勝2敗でいずれも勝利し、総合成績25勝15敗で名大の優勝が決まりました（台風の影響により、フィギュアスケートは中止になり、卓球は順延になりました。）。

これで大会通算成績は、男子が20勝37敗4分け、女子が17勝33敗6分けとなりました（総合優勝の制度が導入された第20回から今回までの総合優勝通算成績は、本学の17勝22敗3分けです。）。

なお、来年度の名阪戦は、大阪大学が当番校となり開催される予定です。

第61回名古屋大学・大阪大学対抗競技大会結果一覧表

種目	戦績					
	対戦結果					
	名大	スコア			阪大	
陸上競技	○	147	—	111	×	
水泳	×	—	—	—	○	
硬式野球	○	3	—	2	×	
準硬式野球	○	19	—	4	×	
硬式テニス	○	9	—	6	×	
ソフトテニス	×	21	—	28	○	
バスケットボール	○	88	—	72	×	
バレーボール	○	—	—	—	×	
ハンドボール	○	—	—	—	×	
ラグビー	○	32	—	7	×	
空手道	×	3	—	4	○	
卓球	台風により延期					
サッカー	○	—	—	—	×	
男子	バドミントン	○	6	—	3	×
	柔道	×	1	—	2	○
	剣道	○	8	—	3	×
女子	ボート	○	—	—	—	×
	ライフル射撃	×	1102	—	1114	○
	弓道	○	—	—	—	×
	自動車競技	×	8	—	30	○
	少林寺拳法	×	—	—	—	○
	アイスホッケー	×	0	—	4	○
	体操	×	—	—	—	○
	スキー	×	—	—	—	○
	航空	○	950	—	50	×
	アメリカンフットボール	○	—	—	—	×
	ゴルフ	○	15	—	0	×
	ソフトボール	×	—	—	—	○
	フィギュアスケート	台風によりノーコンテスト				
	アーチェリー	×	3501	—	3555	○
	ラクロス	×	7	—	11	○
男子	陸上競技	○	47	—	29	×
	硬式テニス	×	3	—	4	○
	ソフトテニス	○	8	—	1	×
	バスケットボール	○	90	—	65	×
女子	バレーボール	○	—	—	—	×
	卓球	台風により順延				
	バドミントン	○	5	—	0	×
	剣道	○	4	—	1	×
男子	ボート	○	—	—	—	×
	弓道	○	—	—	—	×
	フィギュアスケート	台風によりノーコンテスト				
	アーチェリー	×	1271	—	1780	○
	ラクロス	○	9	—	5	×
試合結果		16	男	13		
		9	女	2		
		25	総合	15		



選手宣誓



バスケットボール



サッカー



体操



ライフル

第56回東海地区国立大学体育大会

—男子4位、女子5位—

平成19年度の東海地区国立大学体育大会は、岐阜大学が当番校となり、岐阜大学体育施設及び岐阜市内等の公共体育施設において、6月23日(土)、24日(日)、30日(土)、7月1日(日)、7日(土)、8日(日)の合計6日間にわたり、男子20種目、女子15種目で優勝を目指して熱戦が繰り上げられました

6月24日、あいにくの雨の中、長良川競技場で総合開会式が行われました。各大学関係者、陸上部員出席のもとで、去年の男子優勝校の名古屋大学と女子優勝校の愛知教育大学から優勝杯の返還が行われ、岐阜大学の選手により宣誓が行われました。

今大会は、梅雨時で天候には恵みませんでしたが、硬式野球がトーナメント途中で雨天のため全日程が消化できずオープン扱いとなった以外は、予定していた全ての競技を行うことができました。

大会結果は、男子が4位ということで3連覇を逃し、女子は4位の岐阜大とはわずか1点差の5位でした。

なお、来年度の本大会は、名古屋工業大学及び豊橋技術科学大学が主管校となり、6月下旬から7月上旬にかけて開催される予定です。

第56回東海地区国立大学体育大会総合得点表

■男子

競技種目	名工大		豊技大		愛教大		浜医大		静岡大		三重大		名大		岐大		備考
	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	
1 陸上競技	6	3	7	2	1	10	8	1	2	8	3	6	4	5	5	4	
2 水泳	6	3	8	1	5	4	7	2	2	8	4	5	1	10	3	6	
3 硬式野球																	雨天オープン
4 準硬式野球	3	5.5	5	2.5	1	10	5	2.5	3	5.5	5	2.5	2	8	5	2.5	
5 硬式テニス	7	2	5	4	4	5	3	6	2	8	1	10	6	3	8	1	
6 ソフトテニス	5	2			2	5	6	1	1	6	3	4			4	3	
7 バスケットボール	6	3	5	4	7	2	8	1	1	10	3	6	4	5	2	8	
8 バレーボール	8	1	6	3	5	4	7	2	2	8	4	5	3	6	1	10	
9 卓球	6	2	7	1	5	3			2	6	4	4	3	5	1	8	
10 バドミントン	4	5	8	1	3	6	6	3	2	8	7	2	5	4	1	10	
11 サッカー	7	2	8	1	3	6	4	5	2	8	1	10	5	4	6	3	
12 ハンドボール	3	5			1	8	7	1	4	4	6	2	2	6	5	3	
13 柔道	5	2.5		0	5	2.5			4	4	2	6	1	8	3	5	
14 剣道	6	3	7	2	3	6	8	1	5	4	2	8	4	5	1	10	
15 空手道	5	4	8	1	7	2	1	10	3	6	6	3	2	8	4	5	
16 弓道	1	8			2	6	4	4	5	2	3	5	5	2	5	2	
17 体操	5	2			3	4			6	1	4	3	2	5	1	6	
18 馬術	4	2			4	2			1	6	4	2	3	4	2	5	
19 アーチェリー					4	2			2	4	1	5	3	3	5	1	
20 少林寺拳法			6	1	4	3			3	4	1	6	5	2	2	5	
合計得点		55		23.5		90.5		39.5		110.5		94.5		93		97.5	
男子順位		6		8		5		7		1		3		4		2	

■女子

競技種目	名工大		豊技大		愛教大		浜医大		静岡大		三重大		名大		岐大		備考
	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	
1 陸上競技	6	1.5			1	8	6	1.5	2	6	5	3	4	4	3	5	
2 水泳	7	1			2	6	4	4	6	2	3	5	5	3	1	8	
5 硬式テニス	4	4			5	3	7	1	2	6	6	2	1	8	3	5	
6 ソフトテニス					2	4		0	3	3	1	5			4	2	
7 バスケットボール					2	5	6	1	1	6	3	4	4	3	5	2	
8 バレーボール	5	2					6	1	1	6	4	3	3	4	2	5	
9 卓球					3	3			2	4	1	5	5	1	4	2	
10 バドミントン	7	1			1	8	5	3	6	2	3	5	2	6	4	4	
12 ハンドボール					1						3				2		オープン
13 柔道																	オープン
14 剣道					2	4			3	3	5	1	4	2	1	5	
15 空手道							1	4	3	2			2	3	4	1	
16 弓道	2	6			5	3	6	2	3	5	1	8	4	4	7	1	
17 体操					3								2		1		オープン
19 アーチェリー					2	3					1	4	3	2	4	1	
合計得点		15.5		0		47		17.5		45		45		40		41	
女子順位		7				1		6		2		2		5		4	

18. 全学教育棟（I期）



全学教育棟は、全体面積が約2万㎡に及ぶ建物で、主に昭和37年から42年にかけて段階的に整備され、かつては旧教養部の校舎として使用されていました。

平成3年の大学設置基準大綱化以降は、教養部の廃止に伴い、情報文化学部を設置、3つの独立研究科（国際言語文化・環境学・情報科学）、教養教育院の設置等を経て、各々の拠点として使用されて現在に至っています。

このような経緯から、全学教育棟は、ただ老朽化しているだけではなく、学生の増加による狭隘化や、組織の再編等に伴う研究室・実験室等の属性の複雑化をきたしている等、機能面でも単一部局の利用建物とは事情の異なる様々な課題を抱えていました。

そのため、平成14年には「共通教育棟等の改修工事に関する検討委員会」が設置され、改修工事に関する具体的な検討作業を行いました。この委員会は、平成17年には名称を「全学教育棟等の改修工事に関する検討委員会」に改め、改修工事の実施について更に踏み込んだ検討を行ってきました。

また、改修の年次計画については、特に利用頻度の高い講義室・実験スペースの安全性確保と利用環境の向上を最優先課題として取り組み、南棟・中央棟・北棟の順に改修を行うこととして全体平



面計画を策定しました。これらの検討成果は「全学教育棟等の改修工事に関する検討委員会報告書（平成17年12月）」としてまとめられ、施設管理部ホームページでも閲覧することができます。

昨年度、全学教育棟のI期工事が実現し、南棟（7,347㎡）の耐震補強及び内外装の全面改修を実施しました。

今回の南棟改修では、建物の利用動線を根本的に見直すため、随所に工夫を施しています。玄関周辺の改修では、明るく開放的な空間づくりを行い、EVを設置して利便性の向上を図ったほか、トイレやスロープ、自動ドア等のバリアフリー整備により、誰もが利用しやすい玄関となるよう改

- | | | | | |
|---|--------------------------|---|---|---|
| 1 | 改修後南西外観 | 1 | 5 | 6 |
| 2 | 改修前南西外観 | 2 | | |
| 3 | 3階大講義室 | 3 | 4 | |
| 4 | 4階学生ラウンジ | | | |
| 5 | プレゼンテーションスペース「clas」外部デッキ | | | |
| 6 | 中庭側耐震ブレース | | | |

善しました。玄関に隣接して設けたプレゼンテーションスペースは、教養教育院プロジェクトギャラリー「clas」*1として運営が開始され、屋外に設けたウッドデッキとともに、様々な展示・イベント空間としての積極的な活用が期待されています。

また、南棟の西側端部の2・3階には、従来は遠回りせざるを得なかった北側の大講義室・中講義室へのアクセスが容易になるよう、渡り廊下を設置しました。

各部局エリアの区分（ゾーニング）では、建物中央に設けたコア部分（ラウンジ・階段・EV・トイレ）をはさむ東西方向に全学教育のための講義室・実験室を設け、東側端部には物質環境系の実験室を配置することで、シンプルなゾーニングにより従来の機能錯綜と雑居状態を解消しました。

2～4階に設けた実験室には、高度なインフラ（給排水、吸排気ダクト、大容量配電、高圧ガス配管、実験安全設備など）を備え、各種実験に安全かつ有効に対応できるよう配慮しています。

従来は平床だった3階の大講義室には、床の高低差を付けることにより、後方からも黒板やスクリーンがよく見えるよう改善しました。

耐震補強は、デザインと経済性を考慮して工法を採択しています。近隣の既設校舎（教育学部本館・法学部本館）との外観的な調和を求められる南面・東面は、外部フレーム増設（ダブルウォール）工法とし、その他の面は必要箇所のみを補強するブレース工法を用いました。

その他、省エネ対策として、居室の窓には複層ガラスを採用し、建物内部全般に断熱材を施したほか、屋上緑化を行う等、輻射熱の抑制による空調ランニングコストの低減を図っています。



今後全学教育棟は、中央棟（平成20年3月完成予定）、北棟（平成20年度概算要求事業）と順次改修整備を行っていく予定です。また、各棟に囲まれる3つの中庭のうち、南側の2つは、中央棟の改修を機に、今年度から来年度にかけての整備が予定されています。

中庭の整備については、学生・教職員の参加型プロジェクト「PAPLA」*2により、学生の居場所としての屋外空間のあり方や、教養教育をテーマとしたパブリックアートの設置提案等について、活発な議論と検討作業が進められています。

（施設管理部）

*1 「clas」 = cell for liberal arts & sciences

*2 「PAPLA」 = Public Art Project for Liberal Arts



第13回理学懇話会及び高校生のためのサイエンスカフェを開催

大学院理学研究科は、6月16日(土)、野依記念学術交流会館において、第13回名古屋大学理学懇話会「超弦理論の数理」を開催しました。

本懇話会は、毎年2回開催しているもので、今回は一般市民を含む約180名の参加がありました。特筆すべき点は、参加者の多さもさることながら、参加者のうち70名ほどが高校生であったことです。また初めての試みとして、懇話会終了後引き続き講師を囲んで、高校生のみを対象としたサイエンスカフェを行いました。

今回は、素粒子理論と数学の融合ということで、究極の理論として期待されている超弦理論の物理学的な側面と、数学的な側面について2人の研究者が講演を行いました。

近藤理学研究科長のあいさつに引き続き、まず、杉本茂樹同研究科准教授が「弦と素粒子」と題して講演を行いました。極微の世界を記述する素粒子理論についての解説の後、究極の統一理論を与える可能性のある新しい理論としての弦理論について、最新の研究成果を交えて説明がありました。



熱心に聞き入る参加者

続いて、菅野浩明多元数理科学研究科教授が「驚きの双対性－鏡の国のゲン－」と題して講演を行いました。双対性という数学上の概念をわかりやすい例を用いて説明し、微分、積分といった高校生レベルでも理解できる数学を用いて、弦理論に刺激され発展した最先端の数学について解説しました。

参加者は、物理学・数学の最前線の研究について、難しい内容に関わらず、熱心に聞き入っており、講演の後には多くの質問がありました。

懇話会の後に行われたサイエンスカフェでは、高校生36名、引率の高校の先生4名が5つのテーブルに分かれ、2名の講師を含む6名の大学院理学研究科及び大学院多元数理科学研究科の教員、4名の大学院生を相手に、お菓子をつまみながら質問や議論を取り交わしていました。高校生にとって、最先端の研究者と直接話す貴重な機会であり、思い出に残る催しとなったようです。

なお、同懇話会の様子は、理学広報誌「理 Philosophia」第13号(9月発行)の特集として掲載される予定です。



サイエンスカフェでテーブル毎に分かれて懇談する高校生

公開講演会「雪と氷を通してみる『不都合な真実』」を開催

●21世紀 COE プログラム「太陽・地球・生命圏相互作用系の変動学」

21世紀 COE プログラム「太陽・地球・生命圏相互作用系の変動学」は、7月22日(日)、名古屋市科学館において、公開講演会「雪と氷の世界を通して見る『不都合な真実』」を開催しました。本講演会は、第一線の研究者の研究内容を一般の方々にも聴講してもらうことを目的に開催され、「地球温暖化のカナリア」と言われる氷河や雪の変化から



会場の様子

見えてきた気候変動の予兆について、5名の研究者が最新の研究内容を紹介しました。

まず、藤田耕史環境学研究科准教授が、ヒマラヤの氷河縮小の実態と原因について最新の知見を示し、坂井亜規子同研究科 COE 研究員が、氷河の先端に生じる氷河湖が温暖化で拡大し、下流に被害をもたらす土砂災害について報告しました。続いて、竹内 望千葉大学准教授が、氷河上の生物が織りなす生態系について解説し、氷河が縮退する原因の一つである微生物の影響について発表を行いました。

引き続き、全球的な氷と身近な雪氷についての講演が行われました。植村 立極地研究所研究員は、南極の氷床から採取されたアイスコアの中に閉じこめられた過去の地球の激しい気候変動について解説し、山口 悟防災科学技術研究所研究員は、日本で得られた詳細な積雪データの解析を通して、日本に生じている温暖化と、将来の雪と水資源の変化について発表を行いました。

多数の来場者から高い関心が寄せられ、こうした講演会が、地球温暖化の知見を社会にアピールする機会として盛んになることが期待されます。

平成19年度工学部懇話会を開催

工学部は、7月4日(水)、IB電子情報館大講義室において、平成19年度名古屋大学工学部懇話会を開催しました。

本懇話会は、高等学校の進路指導担当教諭に同学部の教育内容を知ってもらうことを目的に、毎年この時期に行っており、今回は「工学の未来－理系進学者の将来設計のために－」をテーマに、愛知、岐阜、三重の東海3県下を中心に59の高等学校から69名の教諭の参加がありました。

開催に先立ち、小野木工学部長からあいさつと趣旨説明があった後、井上順一郎同学部教授が「いま、工学は何を

目指しているのか」を、本多裕之同学部教授が「工学系研究科におけるバイオ・医用研究」をテーマに講演しました。

引き続き、参加した教諭を14班に分け、研究室の見学が行われました。見学先では、大学院学生による研究発表が行われ、教諭は、大学院学生との対話を通して、学生の成長の様子に接しました。その後、質疑応答及び自由討論が行われ、教諭と同学部教員との忌憚のない意見交換が行われました。

同懇話会は、高等学校教諭と大学教員との相互理解を深めるとともに、高校生が将来の方向性や大学・学部を選択する際の適切な情報を提供するよい機会となりました。



大学院生の研究発表を聞く高等学校教諭



懇話会会場の様子

言語文化フォーラムを開催

●大学院国際言語文化研究科

大学院国際言語文化研究科は、7月14日(土)、文系総合館カンファレンスホール及び同館講義室において、言語文化フォーラムを開催しました。

午前に行われたアクションフォーラムでは、「キャリア教育と大学院」と題し、マスメディアなどの現場で大学院の授業がいかに貴重な資源となるか、といったことについて、共同通信、NHK、中日新聞、国際協力銀行で活躍した経験を持つ教員4名が、ディスカッションを行いました。



アクションフォーラムの様子

続いて行われた院生座談会では、就職内定者等大学院学生6名が、就職の動機、内定までの過程、授業と就職との関連について熱く語りました。なお、その内2名は留学生で、そのすばらしい日本語能力に会場からため息が漏れるほどでした。

午後に開催されたオープンキャンパスでは、同研究科を修了するまでの仕組みが簡潔に説明された後、12講座・1コースの教授陣による模擬授業、レクチャー、研究紹介、講座説明、教員間ディスカッションが2時間にわたって行われました。

同フォーラムは同研究科における初めての試みでしたが、参加者は東海地区から京阪地区、遠く九州にまでおよび、成功裡に終了しました。10月にはフォーラムの第2部が企画されています。

なお、同フォーラムの詳細は同研究科ホームページ内 (<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/action/>) をご覧ください。

台湾南台科技大学学長一行が国際開発研究科を視察

大学院国際開発研究科は、6月26日(火)、台湾南台科技大学の張 信雄学長、頼 明材 企業管理系主任、陳 連凌 応用日語系主任の訪問を受けました。

一行は、本学の他に大阪外国語大学、日本工業大学の視察を予定していました。

まず、一行は、同研究科長室において、西村国際開発研



研究科長室での様子

究科長、大室剛志副研究科長、同大学で講演を行った経験のある滝沢直宏同研究科教授らと、あいさつ及び自己紹介を行った後、西村研究科長から同研究科の概要などについて説明を受けました。引き続き、平野総長を表敬訪問し、総長及び山本理事と、両大学の研究・教育に関する情報交換を行いました。

その後、同研究科に戻った一行は、浅川晃広同研究科講師も交えて、今後の研究者や学生の交流などに関して、意見交換を行いました。

今回を機に、同大学と交流が深まることが期待されています。

留学生のための就職支援セミナー (第1回)を開催

●大学院国際開発研究科



セミナー会場の様子

大学院国際開発研究科は、7月3日(火)、同研究科多目的オーディトリウムにおいて、留学生向けの就職支援セミナーを開催しました。

留学生の中には、専門知識と日本語能力を活かして、日本で就職する方も増加しており、近年、留学生の採用に積極的に取り組む企業も増えています。本セミナーは、留学生に、日本での就職も卒業後の選択肢の一つとして考えてもらうために開催したもので、全4回のセミナーを予定しています。

第1回目の今回は、林テレンプ株式会社人事総務部の小澤 彰氏が、「日本企業における外国人雇用の現状と留学生に期待すること」について講演した後、本学大学院法学研究科を修了し、日本企業での勤務経験のある趙炎さんが、体験談を話しました。

多数の留学生が参加し、活発な質疑応答がなされた有意義なセミナーとなりました。

地域貢献特別支援事業「都市近郊の農業教育公園」第1回講演会を開催

●大学院生命農学研究科附属農場



質疑応答の様子

大学院生命農学研究科附属農場は、6月30日(土)、附属農場農業館において、地域貢献特別支援事業「都市近郊の農業教育公園」第1回講演会を開催しました。同講演会のテーマは、「資源動物を知り、食といのちを考える」で、全4回の開催を予定しています。

今回は、前多敬一郎生命農学研究科教授が、「24時間牛乳を飲む国」と題して、地球規模での食糧事情の概説や、日本の酪農業が抱える問題とその解決における農学の役割などをユーモアを交えて解説し、乳生産を支える乳牛の生理や育種の歴史、酪農業が先端基礎科学によっていかに発展し、マーケットまでを含めたハイテク産業として成り立っているのか、また、大量の乳生産によって栄養不良になったウシの繁殖機能低下の問題などについて紹介しました。

地域の方々を中心に30名を超える参加者があり、食の生産や安全への関心の高さを垣間見ることができました。

オナガドリの剥製標本寄贈における感謝状贈呈式

●博物館



オナガドリのつがいの剥製標本

博物館は、6月25日(月)、稲沢市の内藤 廣氏によるオナガドリの雌雄一对の剥製標本の寄贈に対し、感謝状贈呈式を挙行了しました。今回の寄贈については、富田 武本学名誉教授が、農学部の創設期に家畜育種学教室で、オナガドリの生理遺伝学的研究に学生として参加した経験から、「恩師らの研究の一端を見える形で展示したい」と、内藤氏にオナガドリの提供をお願いし、剥製の作製が実現しました。

オナガドリのオス、メスを並べて展示する博物館は他になく、贈呈式では、西川博

博物館長から内藤氏に感謝状が贈呈されるとともに謝辞が述べられました。

オナガドリの尾羽は、生え替わる普通のニワトリのものと異なり、長く伸びるのが特徴で、長いものでは10メートルにも達します。もともと江戸時代に土佐で作られたもので、尾を伸ばすには、雛の選抜や飼育方法にノウハウがあり、当日は内藤氏から、それらについての詳しい説明がありました。

オナガドリの剥製標本は、博物館の常設展コーナーで展示しています。

附属図書館が2007年春季特別展を開催

附属図書館及び同館研究開発室は、6月4日(月)から22日(金)まで、2007年春季特別展「王権と社会－朝廷官人・真継家文書の世界－」を開催しました。

本展は、専門家の間ではよく知られている真継家文書の現物と内容を、専門外の方々にもできるだけわかりやすく展示、解説したものです。真継家は、銅器の製造者、すなわち鋳物師を統括する家元のような存在であったことが知られていますが、真継家がどのように天皇家に奉仕し、収入を確保し、「王権と社会」を媒介していたのか、朝廷の下級官人としての側面についても紹介しました。

たとえば、真継家は、江戸時代のほぼ全期間を通じて、天皇の代理として伊勢神宮に参拝する「例幣・奉幣」の役目を果たしていましたが、その道中では、一般民衆の目にも触れる様々な儀礼が行われており、人々の持つ天皇のイメージに影響した可能性があります。また、真継家は、天皇の代替わり時に、指定の関所へ赴き外敵等の侵入を防ぐよう命じられる「固関勅符」^{こげん}をうけていますが、古代以来の様式をふまえた「固関勅符」の現物は、ほとんど伝来し



展示の様子

ていないといわれる中、真継家文書中には江戸時代の「固関勅符」が2点も残されており、今回はその2点が並べて展示されました。

16日には、同館多目的室において、富田正弘富山大学人文学部教授による「料紙からみた真継家文書」と題する講演が行われ、126名の参加者がありました。講演では、真継家がどのように文書を「見せよう」としていたのか、文字面だけでなく、顕微鏡を用いた料紙の観察結果などについて報告がありました。また、真継家が天皇家文書（綸旨）に施した文言の改変は、これまで文書の「偽造」と評価されがちでしたが、むしろそのような改変により、文言の意味が人々によく伝わり、「王権と社会」をスムーズに媒介したのではないかとの指摘もありました。さらに、真継家の偽文書関係の展示では、捺印されている内印「天皇御璽」の比較検討が行われました。

開催期間中は、学生、教職員また一般の方々等、計563名の来場者があり、本学が所蔵する歴史史料の重要性の一端を再確認してもらうよい機会となりました。



講演会の様子

アフリカキャンペーン2008講演会を開催

●大学院国際開発研究科

大学院国際開発研究科は、7月10日(火)、ルーズベルトラストン ゴンドゥエ駐日マラウイ共和国特命全権大使を迎えて、アフリカキャンペーン2008講演会を開催しました。本講演会は、同研究科の学生グループ「名古屋 TICAD（アフリカ開発東京会議）アフリカ研究会」と科学研究費助成研究「開発学の学際的アプローチ」との共催で行われ、小



講演会の様子

雨の降るあいにくの天気の中、学内外から約40名の参加がありました。

マラウイは、国民一人当たりの GNI（国民総所得）が約160ドルとアフリカの中でも最貧国の一つであり、我が国との経済関係が必ずしも密接ではありませんが、青年海外協力隊の派遣が1,000人を超えるなど人的交流は活発に行われています。講演会は、山本理事の歓迎のことば、ゲストの吉田昌男 TICAD 市民社会フォーラム理事によるあいさつに続いて、ゴンドゥエ大使の講演、参加者による質疑応答など、約2時間にわたって行われました。

大使からは、マラウイにおける貧困削減政策の概要とその変遷、政策実施の手法についての説明がありました。一村一品運動についても触れ、住民、政府、JICA の三者の協力によって、貧困村落の人々のネットワーク構築がなされ、世帯所得も向上していると紹介され、参加者にとっては日本の開発経験が具体的に開発途上国にどう伝えられ、実践・評価されているかについて、当事者から直接情報を得る貴重な機会となりました。

同講演会は今後も行われ、次回はザンビア大使を迎えて開催される予定です。

環境や健康を守るために化学物質を管理する

本学には、化学物質（試薬）を使用して研究を行っている研究グループが多くあります。それらの化学物質の中には、環境や健康に悪影響を及ぼすものが少なくありません。法律では、毒物及び劇物取締法、PRTR法、労働安全衛生法、消防法等で、化学物質の購入、保管、使用量の把握と保管の徹底が義務付けられています。

PRTR法とは「Pollutant Release and Transfer Register」の略で、日本語では「特定化学物質の環境への排出量の把握等及び管理の改善の促進に関する法律」といいます。法律の目的は、事業者の自主的な化学物質の使用量・方法の改善を促進し、環境の支障が生ずることを未然に防止することであり、2001年に制定されました。具体的には、354種類の第1種指定化学物質において、事業所（本学であれば、東山、鶴舞、大幸地区等）毎の年間取扱量が1トンを超える場合、移動量や大気・水質・土壌への放出量等を地方自治体へ届け出る義務があります。

このような状況の下、本学では、学内の化学物質を適正に管理するため、2004年4月から、オンラインシステムである名古屋大学化学物質管理システム（Management System of Chemical Substances-Nagoya University: MaCS-NU 図1）を使用しています。2006年6月には、名古屋大学化学物質管理ガイドラインを制定し、本学で化学物質を使用する際には、MaCS-NUを使用して化学物質を管理することが義務付けられました。なお、本学では、毒劇物及びPRTR法第1種指定化学物質は使用毎に重量を入力する重量管理で、それ以外の化学物質は在庫本数を管理する単位管理で管理しています。

2007年4月11日現在のMaCS-NUへの登録状況を表1に示します。MaCS-NUに在庫薬品として登録されている約10万本の試薬のうち、約16~18%が重量管理品（毒劇物及びPRTR法第1種指定化学物質）です。2006年度におけるPRTR法の報告（東山地区）では、MaCS-NUを使って、クロロホルムの移動量（廃棄量）3,102 kg、ジクロロメタン2,555 kgを届けました。

本学における化学物質管理での第1の問題点は、MaCS-NUを使用している研究グループが100%にほど遠いこと

名古屋大学化学物質管理システム クイックマニュアル 新規登録編



図2 クイックマニュアル

です。2006年度にMaCS-NUを使用した研究グループは199であり、登録研究グループの67%でした。それに対して、2006年度に登録された化学物質は30,197本であり、2006年度に廃試薬容器の回収で出された化学物質は34,216本であるので、化学物質の本数で見ると登録率は88%です。これらの状況から、化学物質の使用量が少ない研究室を中心にMaCS-NUを必ず使用するよう要請する必要があります。

また、2つめの問題点は化学物質の使用後に、薬品容器が空になったことをシステムに登録していないことです。2006年度に空ビン登録された試薬は約21,000本であり、空ビン／新規登録の割合は約70%でした。これは、化学物質を購入後にせっかく新規登録しても、新規登録後の使用時の登録及び使用後の空ビン登録が十分なされていないためと思われます。

環境安全衛生管理室では、MaCS-NUの使用率を向上させるために、A4版1枚のクイックマニュアル（図2）及び使用方法DVDを作成しています。ご希望の場合は、環境安全衛生管理室（tel: 052-789-3917）までお問い合わせください。今後、MaCS-NUを十分に使用していないと思われる研究室への使用要請を行っていきます。化学物質適正管理へのご理解とご協力をお願いいたします。



図1 MaCS-NUのログイン画面

〈MaCS-NUへの登録状況〉

2007年4月11日現在	
研究グループ数	299グループ
ユーザー数	4,606名
化学物質保管場所	3,382個
カタログデータ	261,512件
登録試薬数	100,185本
重量管理品の本数と割合	
毒劇物	18,309本 (18.2%)
PRTR法第1種指定化学物質	16,184本 (16.2%)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成19年6月16日～7月15日]

記事	月日	新聞等名
1 グローバル COE プログラム：本学は「分子性機能物質科学の国際教育研究拠点形成」、「テキスト布置の解釈学的研究と教育」、「システム生命科学の展開－生命機能の設計」の3件が採択される	6.16 (土)	中日 (朝刊) 日経 (朝刊) 毎日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
	6.30 (土)	読売
2 平野真一総長が「ひとつづくり教育を考える」と題して、椋山女学園大学教育学部開設の記念式典で講演	6.16 (土)	中日 (朝刊)
3 「医学部附属病院門及び外堀」が登録文化財に選ばれる	6.16 (土)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊) 読売
4 中部を彩る：本学文学部哲学科で心理学を専攻した、発達障害支援者の佐藤真由美氏	6.16 (土)	日経 (夕刊)
5 第39回全日本大学駅伝対校選手権大会 東海地区選考会16日開催：金尾洋治監督は「全員がミス無く走れば勝機はある」と話す	6.16 (土)	朝日 (朝刊)
6 私が砕いたベルリンの壁：元在西独日本大使館専門調査員の小野耕二・法学研究科教授が、18年前自ら砕いた「ベルリンの壁」の破片を法学部ギャラリーに展示	6.18 (月)	朝日 (夕刊)
7 改憲の問題点は何か：護憲派の愛敬浩二・法学研究科教授と改憲派の浜谷英博・三重中京大学教授に聞く	6.18 (月)	中日 (朝刊)
8 名大サロンの主役：村瀬聡美・教育発達科学研究科教授 キーワードは「解離」	6.19 (火)	中日 (朝刊)
9 医学部附属病院は伊藤忠商事と協力し、用途別で病院を検索できる「病院情報データベース」を作製	6.19 (火)	日刊工業
10 数理ウェブ23日開催：大沢健夫・多元数理科学研究科教授 「iは地球を救うか(その7)…フリーエの展開」、山路哲史さん・本学大学院生 「数学で最も重要な関数について」	6.19 (火)	中日 (朝刊)
11 公開実験講座2007 「バイオサイエンス・バイオテクノロジーを体験する」8月4、5日開催：社会人と高校生以上の学生が対象	6.19 (火) 6.28 (木)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
12 時日記：小林さやかさん・本学学生 手応えのないまま面接の日々	6.19 (火)	中日 (朝刊)
13 東京都渋谷区の女性専用温泉施設「シエスバ」の爆発事故：田中剛・環境学研究科教授は、「爆発するほどの大量のガスがいきなり吹き出すことは考えられず、喚起の悪い場所にポンプが置かれ、じわじわとガスがたまったのが原因では」と推測	6.20 (水)	中日 (朝刊)
14 天文学講演会「日本の宇宙観測最前線」6月24日開催：國枝秀世・理学研究科教授、福井康雄・理学研究科教授が講演	6.20 (水)	毎日 (朝刊)
15 「テクノ・フロンティアセミナー (TEFS) 一触れしてみよう、電子と情報の最先端に！」7月27日開催：高校生対象	6.21 (木)	中日 (朝刊)
16 中部教育学会第56回大会23日開催：「教員養成改革の動向と今日的課題－今後の教師教育をどのように展望するか」植田健男・教育発達科学研究科教授がコーディネーター	6.21 (木) 6.24 (日)	毎日 (朝刊)
17 老年学：愛知淑徳大学教授・井口昭久・本学名誉教授 衣替え あのにおいは…	6.21 (木)	朝日 (朝刊)
18 訃報：水池敦・本学名誉教授	6.21 (木)	朝日 (朝刊) 中日 (朝刊)
19 22日から大幸医療センターで、乳がんの発症リスクの高い人を対象に、米国では予防効果が示されている「ラロキシフェン」を処方する自由診療を始める	6.22 (金)	中日 (朝刊)
20 福和伸夫・環境学研究科教授が、今世紀前半には必ずくると言われている巨大地震の被害を、最小限にとどめるための耐震改修の必要性について語る	6.22 (金)	朝日 (朝刊)
21 訃報：石黒一三・本学名誉教授	6.22 (金)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
22 本学 日本政策投資銀行と産学連携推進の包括的連携協定を結ぶ	6.23 (土) 6.25 (月)	中日 (朝刊) 日刊工業
23 石川孔明さん・本学大学院生が、林上・環境学研究科教授の指導を受けながら、東部丘陵線 (リニモ) の経営改善のための試案をまとめる	6.23 (土)	読売
24 中日新聞を読んで：中西久枝・国際開発研究科教授 女性、若者の本音報道を	6.24 (日)	中日 (朝刊)
25 松見紀佳・生命農学研究科准教授らの研究グループは、カレー色素クルクミンから生分解性プラスチックを開発	6.25 (月)	日経産業新聞
26 Jr. サイエンス教室 「遺伝子を見てみよう」7月21日開催：小学5、6年と中学生対象	6.25 (月)	中日 (朝刊)
27 岡崎市のごみ処理施設業者選定問題で、伊藤秀章・本学名誉教授が、市南部地域交流センターで講演し市の対応を批判する	6.25 (月)	中日 (朝刊)
28 特別天然記念物「土佐のオナガドリ」の剥製2体が博物館に寄贈される	6.26 (火)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
29 リウマチ市民公開講座7月8日開催：石黒直樹・医学系研究科教授、林和彦・医学部附属病院助教らが話す	6.26 (火) 7.10 (火)	中日 (朝刊) 中日 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成19年6月16日～7月15日]

記事	月日	新聞等名
30 活動通信：本学相撲部と学生団体 Bon Japa (ボンジャパ) が、7月7日名古屋城で夏祭りイベント開催	6.26 (火) 7. 7 (土)	中日 (朝刊)
31 書籍：『環境問題はなぜウソがまかり通るのか』 武田邦彦・元本学工学研究科教授著	6.26 (火)	中日 (夕刊)
32 愛知県水泳選手権大会6月24日開催：女子 平泳ぎ (50 ^歳 、100 ^歳) 福山鎮子さん・本学大学院生 1位	6.26 (火)	朝日 (夕刊)
33 中部日本大学 OB 選手権大会6月17日開催：スナイブ級でヨット部 OB 会が2位 総合でも2位を獲得	6.26 (火)	朝日 (夕刊)
34 ライフピア・シンポジウム「高齢期の生活習慣病」7月8日から4回にわたり、大幸キャンパスで開催	6.26 (火) 6.27 (水) 7. 3 (火) 7. 5 (木)	日経 (夕刊) 毎日 (朝刊) 中日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
35 本学 百五銀行と産学連携協定を結ぶ	6.27 (水) 7. 3 (火)	日経 (朝刊)
36 木曾川大橋、揖斐長良大橋の鋼材腐食について、山田健太郎・環境学研究科教授が補強方法を助言する	6.27 (水)	中日 (朝刊)
37 財団法人科学技術交流財団は、本学と2研究所の共同研究推進事業「機能的電気刺激のための動作予測センシングの開発」を選定	6.28 (木)	中日 (朝刊)
38 文化の集い：アクバル・エスカンダーブルさん・本学大学院生が、自国イランの教育や家庭生活など話す	6.28 (木) 6.30 (土)	朝日 (朝刊)
39 エコトピア科学研究所は、7月1日に「エコトピア科学研究所附属アジア資源循環研究センター」を開設	6.29 (金) 7. 3 (火)	日刊工業 中日 (朝刊)
40 増加する胆道がんの診断と最新の治療法：榎野正人・医学系研究科教授が話す	6.29 (金)	朝日 (朝刊)
41 民族文化映像研究所作品「粥川 (かいがわ) 風土記」7月7日開催：粥川流域の生活記録の上映会	6.30 (土)	中日 (朝刊)
42 叙位叙勲：正四位瑞宝中綬章 築島隆繁・本学名誉教授	6.30 (土)	中日 (朝刊)
43 「第五回 中央日本交流・連携サミット」7月23日開催：司会は科学技術交流財団理事長・松尾稔元本学総長	6.30 (土)	中日 (朝刊)
44 もしも私が国会議員だったら…参院選に立候補したときの公約を一つ作るとしたら：坪井秀人・文学研究科教授「当選しても『先生』呼ばわりされることを拒否」が公約	7. 1 (日)	朝日 (朝刊)
45 ひらめき・ときめきサイエンス「ようこそ大学の研究室へ」27日開催：小中高生向けのプログラム「『細胞ジャングル』探検ツアーで『脳づくり』のしくみを調べよう」	7. 2 (月)	中日 (朝刊)
46 久間防衛相の「米軍の原爆投下『しょうがない』」発言：沢田昭二・本学名誉教授は「原爆投下は終戦を早める目的ではなかったことを歴史学者が明らかにしている。久間氏は歴史を勉強していない」と指摘	7. 2 (月)	朝日 (朝刊)
47 「県肝友会」の定時総会と講演会1日開催：「肝硬変の新しい治療法」林衆治・医学系研究科教授	7. 2 (月)	中日 (朝刊)
48 本学がモンゴル国立大学に設置した「日本教育研究センター」を鮎京正訓・法学研究科教授らが訪問	7. 3 (月)	中日 (朝刊)
49 高等教育研究センターの「ティップス先生」シリーズは、授業改善の事例集として注目を集める	7. 3 (月)	読売
50 排泄ケアについての市民公開講座21日開催	7. 3 (月)	日経 (夕刊)
51 舩名大のいる千賀ノ浦部屋を名古屋場所取材中の記者が体験	7. 4 (火)	朝日 (朝刊)
52 全国国公立・有名私大相談会2007 7月21日開催：副総長が基調講演	7. 5 (木)	朝日 (朝刊)
53 第89回全国高校野球選手権 愛知大会：本学附属高校の初戦相手は愛知啓成高校	7. 6 (金) 7.12 (木) 7.13 (金)	朝日 (朝刊) 中日 (朝刊)
54 スピリチュアルケア研究会公開講座「語りが始まるときーナラティブ・アプローチから考える終末期医療」14日開催：深谷陽子・医学部附属病院看護師	7. 6 (金)	中日 (朝刊)
55 本学 全学部後期日程廃止	7. 7 (土)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
56 叙位叙勲 正四位 佐藤自郎・本学名誉教授	7. 7 (土)	中日 (朝刊)
57 市民公開講演会「炎症性腸疾患・過活動膀胱とその治療について」8月4日開催：後藤百万・医学系研究科教授	7. 7 (土)	中日 (朝刊)
58 公開講演会「雪と氷の世界を通して見る『不都合な真実』」22日講演：藤田耕史・環境学研究科准教授、坂井亜規子・環境学研究科研究員	7. 7 (土) 7.14 (土)	朝日 (夕刊) 中日 (朝刊)
59 富田先生の爪の水虫講座 富田靖・医学系研究科教授	7. 8 (日)	中日 (朝刊)
60 親子体験ツアー「都会で鉱物・化石を探そう！」21日開催：参加者募集	7. 9 (月)	中日 (朝刊)
61 ひらめき・ときめきサイエンス「ホヤとウニの生態観察と受精機構を探る」30日開催：理学研究科附属臨界実験所	7. 9 (月)	中日 (朝刊)
62 「豊かな社会を創造する科学技術シンポジウム」9月27、28日開催	7. 9 (月)	日経 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成19年6月16日～7月15日]

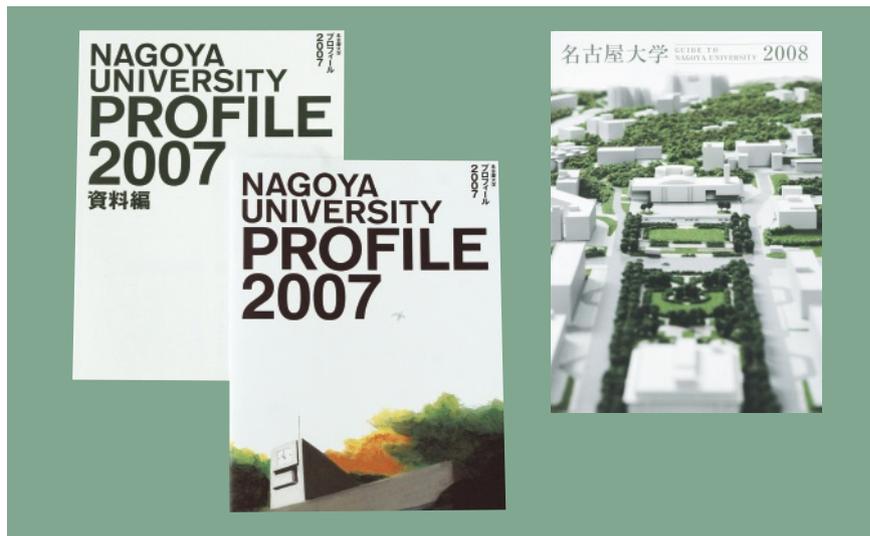
記事	月日	新聞等名
63 民事裁判制度に「満足」している割合は4分の1：菅原郁夫・法科大学院教授が代表を務める民事訴訟制度研究会の調査結果	7. 9 (月)	朝日 (夕刊)
64 大相撲 初の国立大学出身対決 舛名大・本学卒業生 対 一ノ矢 舛名大敗れる	7. 9 (月) 7.10 (火)	中日 (夕刊) 中日 (朝刊) 朝日 (朝刊) 日経 (朝刊) 読売
65 愛知レディース陸上競技大会：安川裕子さん・本学学生 1500メートル1位	7.10 (火)	朝日 (夕刊)
66 本学 静岡銀行グループと産学連携協定を結ぶ	7.10 (火)	中日 (朝刊) 日経 (朝刊)
67 時日記：小林さやかさん・本学学生 焦る連休、神は「辛抱せよ」	7.10 (火)	中日 (朝刊)
68 工学研究科創造工学センター 第5回モノづくり市民公開講座8月3、9日開催	7.11 (水)	毎日 (朝刊)
69 大沼章子氏・本学卒業生 環境省から温泉関係功労者として表彰	7.11 (水)	中日 (朝刊)
70 近代史研究会例会21日開催	7.11 (水)	中日 (夕刊)
71 本学 「宇宙地図」の分析・研究進める	7.12 (木)	日刊工業 中日 (朝刊)
72 朝日カルチャーセンター：杉山直・理学研究科教授 「宇宙交響楽」	7.12 (木)	朝日 (朝刊)
73 過活動膀胱は薬物治療で軽減可能 後藤百万・医学系研究科教授	7.13 (金)	中日 (朝刊)
74 生田幸士・工学研究科教授が、芝浦工業大学の創立80周年記念事業地域フォーラム2007名古屋の「生命と機械工学」で講演	7.13 (金)	日刊工業
75 愛知排泄ケア研究会第6回市民公開講座：附属病院で21日開催	7.13 (金)	中日 (朝刊)
76 中国語で学ぶ談話クラス21日開催：秦 明吾・国際言語文化研究科教授が話す	7.13 (金)	中日 (朝刊)
77 習慣づけよう内視鏡検査：後藤秀実・医学系研究科教授と藤田保健衛生大学教授・芳野純治氏・本学卒業生に聞く	7.14 (土)	中日 (朝刊)
78 三浦陽子さん・本学大学院生が「ロレアル・ユネスコ女性科学者日本奨励賞」を授賞	7.14 (土)	中日 (朝刊) 日経 (朝刊) 日刊工業
79 小野耕二・法学研究科教授のゼミに在籍している12名が、参院選の選挙事務所を訪問	7.14 (土) 7.15 (日)	毎日 (夕刊) 朝日 (朝刊)

概要パンフレット「名古屋大学プロフィール2007」を刊行

本学では、このたび大学紹介パンフレット「名古屋大学プロフィール2007」(年1回発行)を刊行しました。

本誌は、本体編と資料編の2冊で構成されています。本体編は、「名古屋大学の強みを発信する」をコンセプトに制作しており、今年度は、「大学が日本を強くする」というテーマのもと、「総長と本学に関係の深い方との対談」、「本学における重要な取り組み」等をインタビューや寄稿を交えわかりやすく紹介しています。また、今年度は、高級紙と簡易紙の2種類で印刷することで昨年度より発行部数を増やし、より多くの人に配布できるようにしました。

資料編は、数字等のデータにより、本学の取り組みを客観的に紹介しています。ご入り用の方は、広報プラザで入手できます。



また、高校生向けパンフレット「GUIDE TO NAGOYA UNIVERSITY 2008」(年1回発行)も刊行しました。ご入り用の方は、入試課で入手できます。

イベントカレンダー

開催月日・場所・問い合わせ先等	内容
7月7日(土)～9月15日(土) 主管校：京都大学 [問い合わせ先] 学務部学務企画課 052-789-2164	第46回全国七大学総合体育大会 内容：全国国立7大学の運動部が参加
8月1日(水)～9月29日(土) 場所：博物館展示室 時間：10時00分～16時00分 休館日：日・月曜日、8/14臨時閉館 入場料：無料 [問い合わせ先] 博物館事務室 052-789-5767	第12回博物館企画展 「ふしぎふしぎミクロの美術館 ～電子顕微鏡で見るいきものの世界～ 
8月18日(土) 場所：博物館講義室及び 博物館野外観察園 時間：13時00分～16時00分 定員：25名 参加費：2,000円 [問い合わせ先] 博物館事務室 052-789-5767	フラワーアレンジメント 講師：草野博美氏(フローリスト)

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

8月25日(土)～26日(日)

場 所：長良川流域
 時 間：8時00分(8/25)
 ～17時00分(8/26)(1泊2日)
 定 員：30名
 対 象：小学5年生～中学3年生と
 その保護者

地球教室（親子対象フィールドセミナー）



[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

8月25日(土)～27日(月)

8/25 場 所：IB 電子情報館
 時 間：10時00分～15時45分
 8/26 場 所：名古屋市科学館
 サイエンスホール
 時 間：10時00分～18時30分
 8/27 場 所：理学館・野依記念学術
 交流館他
 時 間：10時00分～

第16回公開セミナー

「天文学の最前線 ～謎に挑む日本の宇宙望遠鏡～」

内 容：本セミナーは、市民の皆様へ天文学、宇宙物理学研究の最新成果をお伝えするとともに、天文学、宇宙物理学の面白さを直に感じて頂くことを目的として、大学院理学研究科と名古屋市科学館の共催で平成4年より毎年開催しています。



対 象：高校生以上
 定 員：300名
 (高校生・大学生・教員優先。
 研究室見学は定員100名)
 受 講 料：資料代実費
 500円(高大生)、1,000円(一般)

[問い合わせ先]

理学研究科素粒子宇宙物理学専攻
 宇宙物理学研究室赤外線グループ
 「公開セミナー」係
 052-789-2452

8月28日(火)

場 所：博物館展示室
 時 間：14時00分～15時00分
 入 場 料：無料

第19回博物館コンサート「魅惑の四重奏」(NUMCo)

内 容：ファゴット四重奏 他

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

8月28日(火)、9月4日(火)、 9月27日(木)

場 所：博物館講義室
 時 間：15時30分～17時00分(8/28)
 15時00分～16時30分(9/4)
 14時00分～15時30分(9/27)
 入 場 料：無料

第75回、第76回、第77回博物館特別講演会

第75回(8/28)
 講演題目：「博物館はセラピスト～ホンモノがいやす人の心～」
 講演者：足立 守(博物館教授)
 第76回(9/4)
 講演題目：「放散虫革命～微化石の放散虫が日本列島の歴史を大きく変えた～」
 講演者：水谷伸治郎(本学名誉教授)
 第77回(9/27)
 講演題目：「食と健康～電子顕微鏡で診る～」
 講演者：宮澤七朗(北里大学医学部バイオイメージングセンター室長)

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

9月7日(金)

場 所：IB 電子情報館

[問い合わせ先]

工学部総務課総務掛 052-789-3406

テクノ・フェア名大2007

内 容：工学研究科の研究者が保有する研究シーズを広く企業等の方に公開し、研究内容を理解していただくとともに、企業と共同し、新規産業の創出や新規製品の開発を目指すことにより、産学連携の芽を育むための催しです。



9月8日(土)、9月29日(土)

場 所：経済学研究科
カンファレンスホール

時 間：10時00分～12時00分

[問い合わせ先]

経済学研究科
エクステンション・サービス
ecoextender@soec.nagoya-u.ac.jp

名古屋大学オープンカレッジ「自由奔放！サイエンス」

9月8日(土)

講演題目：「西洋美術における《受胎告知》」

講 演 者：木俣元一（文学研究科教授）

9月29日(土)

講演題目：「名古屋大学が進める先端医療開発」

講 演 者：水野正明（医学系研究科助教）

9月8日(土)～17日(月)

場 所：国立科学博物館 1階展示室
(東京・上野)

時 間：9時00分～17時00分
(入場は16時30分まで、
金曜日は20時まで)

入 場 料：一般・大学生600円
(団体20名以上300円)、
高校生以下無料

主 催：国立科学博物館、名古屋大学

[問い合わせ先]

ハローダイヤル 03-5777-8600

上野の山発 旬の情報発信シリーズ第15回

宇宙137億年の旅

テ ー マ：「みんなここからはじまった！その誕生と進化のナゾに大接近」



9月12日(水)

場 所：環境総合館 1階
レクチャーホール

時 間：18時00分～19時30分

入 場 料：無料

[問い合わせ先]

災害対策室 052-788-6038

第32回防災アカデミー

講演題目：「地下水で東南海・南海地震を予測する」

講 演 者：小泉尚嗣（産業技術総合研究所・地震地下水研究グループ長）

9月22日(土)

場 所：生命農学研究科附属農場
「農業館」

時 間：14時00分～16時00分

定 員：60名

入 場 料：無料

[問い合わせ先]

生命農学研究科附属農場 0561-37-0210

地域貢献特別支援事業

「都市近郊の農業教育公園・講演会」

テ ー マ：「資源動物を知り、食といのちを考える」

講演題目：「家畜から学ぶ親子の絆」

講 演 者：大蔵 聡（生命農学研究科教授）

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

9月25日(火)

場 所：野依記念学術交流館 1階会議室
時 間：17時00分～19時00分
入 場 料：無料

第17回高等研究院セミナー

講演者Ⅰ：多和田真(高等研究院教員)
講演者Ⅱ：奥地拓生(高等研究院教員)

[問い合わせ先]

研究協力・国際部研究支援課高等研究院掛
052-788-6051、6153

9月25日(火)、26日(水)

場 所：工学部 1号館
共 催：愛知県立大学情報科学部、
静岡大学情報学部

情報学ワークショップ2007

[問い合わせ先]

ワークショップ実行委員会
阿草清滋委員長 052-789-3302

9月26日(水)

場 所：野依記念学術交流館

留学生特別コース学位授与式

[問い合わせ先]

学務部学務企画課 052-789-2159

9月26日(水)

場 所：博物館野外観察園
時 間：10時30分～12時00分
参 加 費：無料

博物館野外観察園見学会

案 内：西田佐知子(博物館助教)

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

10月13日(土)

場 所：文系総合館7F
カンファレンスホール
時 間：14:00～17:00
入 場 料：無料

国際言語文化研究科

アクション・フォーラム

内 容：①基調講演及び
②名誉修了生発表会
講 演 者：①金平茂紀(TBS報道局長)(未定)
②李澤熊(名古屋大学准教授)、

ロナルド・ジェフリー・スチュワート(県立広島大学講師)、他2名

[問い合わせ先]

国際言語文化研究科 鈴木繁夫教授
052-789-4791

名大トピックス No.171 平成19年8月20日発行

編集・発行/名古屋大学広報室

本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報室にお寄せください。

名古屋市千種区不老町(〒464-8601)

TEL 052-789-2016 FAX 052-788-6272 E-mail kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

表紙

力が入った練習風景。
(相撲部)
(平成19年6月16日)



名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ

(<http://www.nagoya-u.ac.jp/topics/>) でもご覧いただけます。

64 明治初年愛知県公立病院外科手術の図

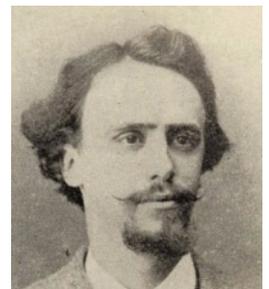
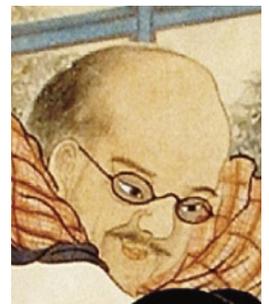
「明治初年愛知県公立病院外科手術の図」（額装サイズで縦99.3cm × 横123.8cm）は、本学附属図書館医学部分館内の医学部史料室に額装された状態で保管されています。この図は、愛知県出身の浮世絵画家である柴田芳洲^{しばた ほうしゅう}が描いたもので、正確な制作年は明らかではありませんが、1880年頃のものと考えられています。

図中の左上に書かれた「学士老烈先生嘱」との文字から、明治期の「お雇い教師」であるローレツ（アルプレヒト・フォン・ローレツ、オーストリア出身、1846-1884）の依頼に応じて描かれたものであることがわかります。この図では、当時天王崎町（現在の名古屋市中区栄一丁目）に新築された愛知県公立病院（1877-1881）内と推定される一室での外科手術の様子が描かれ、患者を含めた7名の人物が描かれています。これらの人物のなかには名古屋大学史のみならず、日本の近代医学史の観点からも重要な人物3名—左端に描かれた和服姿で眼鏡をかけたローレツ、中央

に描かれた洋服姿の片膝立ちで執刀している後藤新平、その右横で患者の右腕を支える和服姿の司馬凌海—が描かれています。

ただし実際には、この3名がここに描かれたような形で一堂に会することは不可能でしたから、この図は実際に行われた外科手術のようすを描写したものではありません。また、この図の制作を依頼したローレツは、当時30歳を超えたばかりの青年医師でしたが、「老烈」の表記にちなんで自身を老人風に描かせているともいわれています。

この図は、登場人物などに虚構性が認められる絵画ではありますが、そこに描かれた手術情景については「スキンネル・マスクを用いて施されたクロロフォルム麻酔下の手術記録、しかも視覚的記録としては、日本の近代外科史上、最古に属すると言われる」ものと評されています（第24回日本医学会総会「医学史展示」図録『尾張から見た日本と世界の医学史』1998年）。



1 | 2
| 3

- 1 「明治初年愛知県公立病院外科手術の図」（本学附属図書館医学部分館内医学部史料室所蔵）
- 2 上記手術図に描かれているローレツ（拡大図）
- 3 ローレツの肖像写真（佐々木仁一『ホルン紀行』やまがた豆本第3冊、1971年所収）